Best Rugby
2. No Penalty Game

反則が少ないほど良いということは言うまでもないことです。まずこの大原則を認識しなければなりません。

ミスによっておこるスクラムでゲームを再開する「小さな反則」はミスをしないように求められますがいくら注意しても絶無という訳にはいかないものです。ペナルティを科せられる「大きな反則」は故意でなければ仕方ないという言い訳をする人がいますが、全力で反則をしないという努力とその前提に絶対に反則をしないという決意が重要であり必要です。ラグビーを楽しみ（enjoyment）、ラグビーを通しての友情（Friendship through Rugby）を暖めることを喜ぶことが目的であり大切なことです。

キックを科せられる反則に Penalty kick が科せられるものと Free kick が科せられるものがあるのは反則の内容によるものですがルールの目的であるプレーヤーが心得るべき基本的なことが 3 つあります。

1. 不公平にならない（equal condition）
2. オープンプレーをスムーズに（open play）
3. 安全・事故防止（injury prevention）

そして総体的なものとして 2 つあります。

a. スポーツマンシップに反しない（競技規則 10 条 4(m)項）
b. 個人、チームが反則を繰り返さない競技規則 10 条 3(a)および(b)項）

反則の項目を数えてみると 200 以上ありますがこれらはすべて机上の議論から作られたものではなく実際に起こった事態を反省し話し合って上記の目的に照らして決められたものばかりです。反則項目 200 以上といえば凄く多いように思われるかもしれませんがプレーヤーが後者の 2 つをしっかり心がけておけば自由に伸び伸びとゲームを楽しめることは間違いのないところです。整理して頭に入れると混乱を招くこともありません。ルールはプレーヤーもレフリーも観衆にも反則を少なくするという平素の心がけと練習時の努力が求められます。その方策の第一として次の反則一覧表を活用して各自の「大きな反則」について記録を残すことがあげられます。この記録は反則に対して鈍感にならないために必要で有効なものです。それはチーム全体としても必要であって指導者の役目の一つです。記録を集計してみると個人およびチームの記録の欠如や精神的欠如を始め指導の誤りや傾向が明白になります。

尚、以下は 2012 年度競技規則のペナルティ一覧です。

2012.01.29
西川　義行

条1	条2	項1	項2		内容
3		2		認められた人数以上のプレーヤーからなるチーム	いずれのチームも、相手側のプレーヤーの人数について、試合前、試合中のいつでもレフリーに異議を申し立ててよい。レフリーは、プレーヤーの人数が多すぎると認めれば直ちに、そのチームのキャプテンに適切な人数に減らすよう命ずる。ただし、申し立てた時点での得点は変わらない。 罰：次に試合の再開される地点でペナルティキック。
		11	(c)	再度試合に戻ることを望むプレーヤー	レフリーの許可を受けることなく、そのプレーヤーが再び試合に加わり、または、交替/入替えのプレーヤーが試合に加わり、レフリーがその行為を、味方を助ける、あるいは、相手側を妨害するものであるとみなした場合、不行跡として罰を科す。 罰：次に競技が再開される予定の地点でペナルティキック。
4		5	(c)	プレーヤーの服装の点検	試合前の服装点検で、レフリーまたはタッチジャッジが、本条に禁止されているものを着用しているプレーヤーにそのことを告げ、後に、そのプレーヤーが競技区域でまだそれを着用しているのが判明した場合には、不行跡で退場を科される。 罰：プレー再開の地点でペナルティキック。
9	A	2	(d)	ゴールキックの特別な場合	ペナルティゴールを防ぐ目的でボールに触れてはならない。 罰：ペナルティキック
	B	2	(c)	キッカー側	キッカーがキックするため近づき始めた後にボールがタッチにころがりでたときには、キックをすることは認められない。 罰：キッカー側のプレーヤーの反則に対してはキックの禁止。

条1	条2	項1	項2		内容
10		1	(a)	妨害	チャージまたは、押すこと：ボールに向って走るいずれのプレーヤーも、同じくボールに向って走る相手のプレーヤーも、互いに肩と肩で触れあう以外に相手をチャージし、または押してはならない。 罰：ペナルティキック
			(b)		ボールキャリアーの前方を走ること：いずれのプレーヤーも、味方のボールキャリアーの前方で故意に動く、または、故意にその前方に立つことによって、そのボールキャリアーに相手側がタックルするのを妨害したり、ボールを持つことがありうるプレーヤーが実際にボールを持ったときにタックルする機会を奪ってはならない。 罰：ペナルティキック
			(c)		タックラーへの妨害：いずれのプレーヤーも、故意に相手側のプレーヤーがボールキャリアーにタックルするのを妨害する位置へ動いたりまたはその位置に立ってはならない。 罰：ペナルティキック
			(d)		ボールへの妨害：いずれのプレーヤーも、故意に、相手側のプレーヤーがボールをプレーするのを妨害する位置へ動いたり、またはその位置に立ってはならない。 罰：ペナルティキック
			(e)		ボールキャリアーが前方の味方プレーヤーのところへ走り込むこと：いずれのプレーヤーも、故意に前方の味方プレーヤーのいるところと走り込んではならない。 罰：ペナルティキック
		2	(a)	不当なプレー	故意に違反すること：プレーヤーは競技規則に故意に反則をしてはならない、また不正にプレーしてはならない。故意に違反するプレーヤーには、注意をするか、同様の違反や類似の違反を再び犯すならば退場となることを警告するか、ないしは退場させなければならない。 罰：ペナルティキック もしその反則がなければトライが得られたであろうと思われる場合は、ペナルティトライを与えなければならない。不当なプレーでトライが得られるのを妨げるプレーヤーは警告し、かつ一時的退出を命ずるか、ないしは退場させなければならない。
			(b)		時間の空費：いずれのプレーヤーも、故意に時間を空費してはならない。 罰：フリーキック
			(c)		タッチ等にボールを投げること：いずれのプレーヤーも、腕または手を使って、故意にボールをノック、または置き、または押し進めて、または投げて、タッチまたはタッチインゴールに入れるか、またはデッドボールラインの外へ出してはならない。 罰：反則の起きた地点がタッチラインから15メートル以内にある時は、反則の起った地点に対向する15メートルライン上、それ以外のフィールドオブプレー内での場合は反則の起きた地点、インゴールの中の場合は反則の起った地点に対向するゴールラインから5メートルかつタッチラインから少なくとも15メートル離れた地点で、それぞれペナルティキック。 もしその反則がなければトライが得られたであろうと思われる場合は、ペナルティトライを与えなければならない。
		3	(a)	反則を繰り返すこと	反則の繰り返し：いずれのプレーヤーも、競技規則のいずれにも繰り返し違反してはならない。反則を繰り返す場合には、繰り返す事実が問題であり、反則を意図しているかどうかは問題ではない。 罰：ペナルティキック そのような反則の繰り返しで罰を与えられたプレーヤーに対して、レフリーは警告するとともに、一時的退出を命ぜなければならない。また、そのプレーヤーが同様の反則や類似の反則を繰り返した場合には、そのプレーヤーを退場させなければならない。
			(b)		チームによる反則の繰り返し：同一チームの複数のプレーヤーが同じ違反を繰り返す場合には、レフリーはそれが反則の繰り返しに相当するかどうかを決めなければならない。もし相当する場合には、チーム全体に対して注意を与えて、その後にまた違反を繰り返した場合には、反則を犯したそのプレーヤーに警告を与えて、一時的退出を命じる。その後にまた同じチームのプレーヤーが違反を繰り返した場合には、レフリーは反則を犯したそのプレーヤーに退場を命じる。 罰：ペナルティキック 反則によって、得点されうる可能性があったトライが妨げられた場合、ペナルティトライが与えられる。

条1	条2	項1	項2		内容
10		4	(a)	危険なプレー、不行跡	殴打：いずれのプレーヤーも、相手側プレーヤーを拳や腕、肘・肩・頭・膝を使って殴打してはならない。 罰：ペナルティキック
			(b)		踏みつけること：いずれのプレーヤーも相手側プレーヤーを踏みつけてはならない。 罰：ペナルティキック
			(c)		蹴ること：いずれのプレーヤーも相手側プレーヤーを蹴ってはならない。 罰：ペナルティキック
			(d)		足でつまずかせること：いずれのプレーヤーも、相手側プレーヤーを足でつまずかせてはならない。 罰：ペナルティキック
			(e)		危険なタックル：いずれのプレーヤーも、相手側プレーヤーに早すぎるタックル、遅すぎるタックル、または危険なタックルをしてはならない。 罰：ペナルティキック いずれのプレーヤーも、相手側プレーヤーの肩の線より上へタックル、あるいはタックルしようとすることは、たとえタックルが肩の線より下から入ったとしても、してはならない。相手の頚部、または頭部へのタックルは危険なプレーである。 罰：ペナルティキック スティフアームタックルは危険なプレーである。スティフアームタックルとは腕を伸ばして相手側プレーヤーに打ち付けるようなタックルのことである。 罰：ペナルティキック ボールを持っていないプレーヤーに対しプレーすることは、危険なプレーである。 罰：ペナルティキック いずれのプレーヤーも、地面から両足が離れている相手側プレーヤーをタックルしてはならない。 罰：ペナルティキック
			(f)		ボールを持っていない相手側プレーヤーにプレーすること：スクラム、ラック、モールの中にいる場合を除き、ボールを保持していないいずれのプレーヤーも、ボールを持っていない相手側プレーヤーを捕え、押し、または妨害してはならない。 罰：ペナルティキック
			(g)		危険なチャージ：いずれのプレーヤーも、ボールを持っている相手側プレーヤーをつかもうとしないで、チャージしたり突き倒したりしてはならない。 罰：ペナルティキック
			(h)		プレーヤーは、ラックまたはモールにチャージしてはならない。チャージには、腕を使っていない、または、プレーヤーをつかんでいない接触を含む。
			(i)		ジャンプしているプレーヤーへのタックル：いずれのプレーヤーも、ラインアウトで、または空中のボールをとるためにジャンプしている相手側のプレーヤーにタックルしたり、片足または両足をはらったり、押したり、引っぱってはならない。 罰：ペナルティキック
			(j)		プレーヤーをグラウンドから持ち上げて落とす、または、両足がまだ地面から離れている相手プレーヤーを、頭および/または上半身が地面に接触するように落としたり力を加えたりするのは、危険なプレーである。 罰：ペナルティキック
			(k)		スクラム、ラック、モールでの危険なプレー：スクラムでフロントローは、突進してスクラムを組んではならない。 罰：ペナルティキック スクラムでフロントローは、故意に相手を宙に浮かせるか、または相手をスクラムから押し出してはならない。 罰：ペナルティキック プレーヤーは、ラック・モール内の他のプレーヤーにバインドしようとせずに、ラックまたはモールに突進してはならない。 罰：ペナルティキック いずれのプレーヤーも、故意にスクラム、ラック、またはモールをくずしてはならない。 罰：ペナルティキック

条1	条2	項1	項2		内容
10		4	(l)	危険なプレー、不行跡	報復行為：いずれのプレーヤーも、報復行為を加えてはならない。相手側が反則をしていても、相手側プレーヤーに危険ないかなる行為もしてはならない。 罰：ペナルティキック
			(m)		スポーツマンシップに反する行為：プレーヤーは、競技場においては健全なスポーツマンシップの精神に反するようないかなることも行ってはならない。 罰：ペナルティキック
			(n)		競技が停止している間の不行跡：いずれのプレーヤーも、競技が停止している間に、相手側プレーヤーに対し、不行跡を犯したり、妨害したり、その他いかなる方法でも相手の邪魔をしてはならない。 罰：ペナルティキック 第10条4(a)から(m)に関する罰と、同じ罰を与える。ただし、ペナルティキックは、次に競技が再開される予定の地点に与えられる。その地点がタッチライン上、またはタッチラインから15メートル以内にあるときは、反則の起った地点に対向する15メートルライン上の地点。 反則がなかった場合の再開方法が、5メートルスクラムの場合には、ペナルティキックのマークは、スクラムの地点。 反則がなかった場合の再開方法が、ドロップアウトの場合には、反則をしなかった側は、22メートルライン上のいずれかの地点を選んでペナルティキックを行ってよい。 ペナルティキックが与えられ、キックを行う前に、反則した側のプレーヤーが、さらに不行跡の反則をしたとき、レフリーは、不行跡をしたプレーヤーに警告を与えるか、または退場を命じ、かつペナルティキックのマークを10メートル進める。これはもとの反則と不行跡の両方をつぐなうためである。 ペナルティキックが与えられ、キックを行う前に、キッカー側のプレーヤーが、さらに不行跡の反則をしたとき、レフリーは、不行跡をしたプレーヤーに警告を与えるか、退場を命じ、かつペナルティキックの無効を宣し、相手側にペナルティキックを与える。 ボールがまだプレーされている間に、競技区域外で起った反則で本条には含まれない反則に対しては、反則の起った地点に対向する15メートルライン上でペナルティキックを与える。
			(o)		キッカーに対するレイトチャージ：いずれのプレーヤーも、まさにボールを蹴り終わった相手側プレーヤーを、故意にチャージまたは妨害してはならない。 罰：ペナルティキック。マークは、反則をしなかった側の選択によって、反則の地点またはボールの落ちた地点。 反則の地点：反則の地点が、キッカー側のインゴールであれば、ペナルティキックは、実際に反則の起った地点に相対する、ゴールラインから5メートル、タッチラインから少なくとも15メートルの地点に与えられる。 違反をしなかったチームは、ボールが地面に落ちた地点、あるいは、落ちる前にプレーをした地点で、少なくともタッチラインから15メートルの地点で、ペナルティを選択することができる。 ボールの着地点：ボールがタッチに落ちたときは、選択できるペナルティキックのマークは、ボールがタッチに出た場所に対向する、15メートルライン上の地点。ボールがタッチラインから15メートル以内で落ちた、または、落ちる前にプレーがなされたときは、選択できるペナルティキックのマークは、ボールが落ちたまたはプレーされた場所に対向する、15メートルライン上の地点。 ボールがインゴール、タッチインゴール、またはデッドボールラインを越えまたは、デッドボールラインの上に落ちたときは、選択できるペナルティキックのマークは、ボールがゴールラインを越えた場所に対向する、ゴールラインから5メートル、タッチラインから少なくとも15メートルの地点。 ボールがゴールポストかクロスバーにあたった場合には、選択できるペナルティキックのマークは、ボールが地面に落ちた地点。
			(p)		フライング･ウエッジ、キャバルリー･チャージ：いずれのチームも、これらを使用してはならない。 罰：反則の地点においてペナルティキック。 「フライング・ウエッジ」通常は相手ゴールライン近くで攻撃側にペナルティキックまたはフリーキックが与えられた時に行われる。 タップキックを行ったプレーヤーまたはショートパスを受け取ったプレーヤーがゴールラインへ突進する。直ちに、その両側を味方プレーヤーがウエッジの形にバインドする。しばしばこれらのプレーヤーがボールキャリアーの前方に位置することが多く、競技規則に反する。 罰：反則の地点においてペナルティキック。 「キャバルリー・チャージ」通常は相手ゴールライン近くで攻撃側にペナルティキックまたはフリーキックが与えられた時に行われる。攻撃側の1人のプレーヤーがキッカーの後方に少し離れて立つ、または、攻撃側の複数のプレーヤーがフィールドを横断するラインを形成して、キッカーの後方に少し離れて立つ。 攻撃側のプレーヤーはキッカーの後方で互いに通例1～2メートルの間隔を開けて並ぶ。キッカーの合図で前方に突進する。キッカーはこれらのプレーヤーが自分に近づいてからタップキックを行い、キッカーの後方からスタートを切ったプレーヤーにパスする。 罰：反則の地点においてペナルティキック。
			(s)		すべてのプレーヤーは、レフリーの権限を尊重しなければならない。また、レフリーの決定に反論してはならない。キックオフ、あるいは、注意、一時的退出または退場の後のペナルティキックの場合を除き、プレーヤーは、レフリーが笛を吹いた場合には、直ちにプレーを停止しなければならない。 罰：ペナルティキック。

条1	条2	項1	項2		内容
11		4	(a)	10メートル規則によるオフサイド	味方のプレーヤーが前方へキックしたとき、前方にいるオフサイドプレーヤーは、ボールをプレーしようと待っている相手側、またはボールが地面に着くもしくは着くと予想される地点から10メートル離れた、ゴールラインに平行な想定されたラインより前方にいる場合には、試合に参加しているものとみなされる。このオフサイドプレーヤーは、この想定された10メートルライン、または、10メートル以内の場合はキッカーの後方まで直ちに移動しなければならない。また、移動中に、相手側プレーヤーを妨害してはならない。 罰：ペナルティキック
			(b)		このオフサイドプレーヤーは、移動中、相手側のいかなる行為によってもオンサイドにならない。しかし、完全に10メートル移動する前でも、味方のオンサイドプレーヤーがこのオフサイドプレーヤーの前方へ走り出た時にはオンサイドとなる。 罰：ペナルティキック
			(c)		10メートル規則によりオフサイドのプレーヤーが、ボールを受けようとしている相手側プレーヤーをチャージするときは、レフリーは、直ちに笛を吹いて罰を科さなければならない。ちゅうちょすると、相手側のプレーヤーに危険をおよぼす。 罰：ペナルティキック
			(d)		10メートル規則によりオフサイドのプレーヤーが、相手側のプレーヤーが受け損じたボールをプレーしたときは、ペナルティキックを科す。 罰：ペナルティキック
			(e)		10メートル規則は、ボールがゴールポストまたはクロスバーに当った場合にも適用する。問題は、ボールの着地点である。オフサイドにあるプレーヤーは、想定された10メートルラインの前方にいてはならない。 罰：ペナルティキック
			(f)		プレーヤーがボールを蹴り、相手側のプレーヤーがそのキックをチャージダウンし、そして、ゴールラインに平行な想定上の10メートルラインの前方にいたキッカーの味方のプレーヤーがボールをプレーした場合、10メートル規則は適用されない。ボールがタッチに出る、または、相手側のプレーヤーによってプレーされるが、チャージダウンされなかった場合は、10メートル規則が適用される。 罰：一般のプレーにおいてオフサイドで罰せられる場合、相手側は、反則の地点でのペナルティキック、または反則した側が最後にボールをプレーした地点においてのスクラムかのいずれかを選択する。最後にボールをプレーした地点が反則した側のインゴールのとき、スクラムが選択された場合の地点は、その最後のプレーの地点に相対する、ゴールラインから5メートルの地点。
		7		ノックオン後のオフサイド	プレーヤーがノックオンしたボールを、オフサイドの位置にある味方のプレーヤーがプレーしたとき、そのプレーで相手側から利益を奪った場合にはオフサイドの罰を科す。 罰：ペナルティキック
		9		うろうろすること	「うろうろしているプレーヤー」とは、オフサイドの位置にとどまるプレーヤーのことである。相手側がボールを自由にプレーするのを妨げることは、競技に参加していることであり、罰を科す。レフリーは、「うろうろしているプレーヤー」が相手側の行為によりオンサイドとなる利益を得ることがないように注意する。 罰：ペナルティキック
12		1	(e)	ノックオンまたはスローフォワードが起った場合	故意のノックオンまたはスローフォワード：プレーヤーは、手または腕を用いて故意にボールを前方にノックしたり、故意にスローフォワードをしてはならない。 罰：ペナルティキック。その反則がなかったならばほぼ間違いなくトライが得られたと認められる場合は、ペナルティトライを与えなければならない。
13		16	(b)	キッカー側	ボールの前方から戻りつつあるキッカー側のプレーヤーは、キックが非常に早く行われたために退くことができなかった場合には、罰せられない。そのようなプレーヤーは味方の行為によりオンサイドとなるまで退くことをやめてはならないし、競技に参加してはならない。 罰：22メートルラインの中央でスクラム、反則しなかった側がボールを入れる。
		17	(a)	相手側	相手側は、ボールがキックされる前に22メートルラインを越えてチャージしてはならない。 罰：反則の地点でフリーキック
			(b)		相手側プレーヤーが22メートル区域の中にとどまり、ドロップアウトを遅らせるか妨害した場合、そのプレーヤーは不行跡として扱われる。 罰：22メートルライン上でペナルティキック

条1	条2	項1	項2		内容
14		1	(a)	地上に横たわっているプレーヤー	ボールを持って地上に横たわっているプレーヤーは次の3つのうち1つを直ちに行わなければならない。 ．ボールを持って立ちあがる ．ボールをパスする ．ボールを手放す 罰：ペナルティキック
			(b)		ボールをパスしたり手放したプレーヤーは、すぐに立ちあがるか、ボールから離れなければならない。 罰：ペナルティキック
			(c)		ボールを持っていないプレーヤーは、ボールの上に、ボールをおおって、またはボールに近接して横たわって、相手側がボールを獲得するのを妨げてはならない。 罰：ペナルティキック
			(d)		(d) 地上に横たわっているプレーヤーは、相手側プレーヤーをタックルしたり、タックルしようとしたりしてはならない。 罰：ペナルティキック
		2	(a)	立っているプレーヤー	ボールを持って地上に横たわっているプレーヤーを越えて倒れ込むこと：プレーヤーは、ボールを持って地上に横たわっているプレーヤーの上に、またはそのようなプレーヤーを越えて故意に倒れ込んではならない。 罰：ペナルティキック
			(b)		ボールに近接して地上に横たわっているプレーヤーを越えて倒れ込むこと：プレーヤーはボールを中にして、またはボールに近接して地上に横たわっている2人以上のプレーヤーの上に、またはそのようなプレーヤーを越えて故意に倒れ込んではならない。 罰：ペナルティキック

条1	条2	項1	項2		内容
15		4	(a)	タックラー	プレーヤーが相手側プレーヤーをタックルして双方が地面に倒れたとき、タックラーは直ちにタックルされたプレーヤーを放さなければならない。 罰：ペナルティキック
			(b)		さらにタックラーは直ちに立ち上がるか、タックルされたプレーヤーとボールから直ちに離れなければならない。 罰：ペナルティキック
			(c)		タックラーはボールをプレーする前に立ち上がらなければならず、立ち上がった後は、どの方向からボールをプレーしてもよい。 罰：ペナルティキック
		5	(a)	タックルされたプレーヤー	タックルされたプレーヤーは、ボールの上に、ボールをおおって、またはボールに近接して横たわって、相手側がボールを獲得するのを妨げてはならないし、プレーの継続のため、直ちにボールをプレーできるようにしなければならない。 罰：ペナルティキック
			(b)		タックルされたプレーヤーは直ちにボールをパスするか、ボールを放さなければならない。さらにそのプレーヤーは直ちに立ちあがるか、ボールから離れなければならない。 罰：ペナルティキック
			(c)		タックルされたプレーヤーはボールをいずれかの方向に置くことによってボールを手放すことができる。ただし動作は直ちに行わなければならない。 罰：ペナルティキック
			(d)		タックルされたプレーヤーは地面上でいずれかの方向にボールを押し進めること（前方にではなく）によってボールを手放すことができる。ただし動作は直ちに行わなければならない。 罰：ペナルティキック
			(e)		立っている相手プレーヤーがボールをプレーしようとする場合、タックルされたプレーヤーはボールを放さなければならない。 罰：ペナルティキック
		6	(a)	その他のプレーヤー	タックル後は、他のいずれのプレーヤーも立っていなければボールをプレーすることはできない。立っているプレーヤーとは、足以外の体の部位が、地面、または地上に横たわっているプレーヤーにもたれかかっていないプレーヤーのことである。 罰：ペナルティキック 例外：ボールがインゴールに入った場合。ゴールライン近くでのタックル後、ボールが手放されインゴールに入った場合、地上に横たわっているプレーヤーを含め、プレーヤーはいずれもボールをグラウンディングすることができる。
			(c)		ボールキャリアーの相手側プレーヤーがボールキャリアーを地面に倒しタックルが成立したら、立ったままでいる相手側プレーヤーは、ボールとボールキャリアーを放さなければいけない。その後、立っているいずれのプレーヤーも、ボールの後方、かつ、自陣ゴールラインに近い側のタックルされたプレーヤーまたはタックラーのいずれかの真後ろから、ボールをプレーすることができる。 罰：ペナルティキック
			(d)		タックルの地点、またはタックルに近接した地点で、ボールをプレーする他のプレーヤーは、ボールの後方、かつタックルされたプレーヤーまたはタックラーのどちらかで自陣ゴールラインに近い方のプレーヤーの真後ろから、プレーしなければならない。 罰：ペナルティキック
			(e)		ボールを獲得したプレーヤーは、タックルの地点から離れるか、パス、あるいはキックして、直ちにボールをプレーしなければならない。 罰：ペナルティキック
			(f)		最初にボールを獲得したプレーヤーは、相手プレーヤーにタックルされた場合を除き、タックルの地点、またはタックルに近接した地点で地面に倒れてはならない。 罰：ペナルティキック
			(g)		タックルの地点、またはタックルに近接した地点で、最初にボールを獲得したプレーヤーは、相手プレーヤーがボールの後方、かつタックルされたプレーヤーまたはタックラーのどちらかで自陣ゴールラインに近い方のプレ ーヤーよりも後方から、プレーする限りは、その相手プレーヤーにタックルされることが有り得る。 罰：ペナルティキック
			(h)		タックル後は、地上に横たわっているプレーヤーはいずれも相手側プレーヤーがボールを獲得しようとするのを妨げてはならない。 罰：ペナルティキック
			(i)		タックル後は、地上に横たわっているプレーヤーはいずれも相手側プレーヤーをタックルしたり、タックルしようとしてはならない。 罰：ペナルティキック
			(j)		タックル後タックルされたプレーヤーが、トライしようとしてゴールライン上またはゴールラインを越えて、ボールをグラウンディングしようとしているとき、相手側プレーヤーは、そのプレーヤーからボールを奪ってもよい。ただし、相手側プレーヤーはボールをキックしたり、キックしようとしたりしてはならない。 罰：ペナルティキック

条1	条2	項1	項2		内容
15		7	(a)	行ってはならないプレー	いずれのプレーヤーもタックルされたプレーヤーがボールをパスすることを妨げてはならない。 罰：ペナルティキック
			(b)		いずれのプレーヤーもタックルされたプレーヤーがボールを手放し、立ち上がったり、ボールから離れることを妨げてはならない。 罰：ペナルティキック
			(c)		いずれのプレーヤーもボールをはさんで、またはボールに近接して地上に横たわっている2人以上のプレーヤーの上に、または越えて倒れ込んではならない。 罰：ペナルティキック
			(d)		立っているプレーヤーは、ボールに近接していない相手側プレーヤーをチャージまたは妨害してはならない。 罰：ペナルティキック
			(e)		危険性（ボールをパスするか、手放さない場合）：タックルされたプレーヤーが直ちにボールを手放さないか、もしくはボールから離れようとしないか、またはこのようにすることを妨げられた場合には危険が予想できる。このような場合、レフリーは直ちに罰を科さなければならない。 罰：ペナルティキック

条1	条2	項1	項2		内容
16		2	(a)	ラックへの参加	ラックを形成しようとするプレーヤー、ラックに参加しているプレーヤー、および新たに参加しようとするプレーヤーは、頭と肩を腰よりも低くしてはならない。 罰：フリーキック
			(b)		ラックに参加するプレーヤーは、腕全体を使って、味方または相手側プレーヤーにバインドしなければならない。バインドは、ラックに参加するプレーヤーの体の他の部分との接触よりも先、または同時でなければならない。 罰：ペナルティキック
			(c)		ラックの中で他のプレーヤーに手をかけていることはバインドしていることにはならない。 罰：ペナルティキック
			(d)		ラックを形成しようとするプレーヤー、ラックに参加しているプレーヤー、および新たに参加しようとするプレーヤーは、立っていなければならない。 罰：ペナルティキック
		3	(a)	ラッキング	ラックの中のプレーヤーは立っていようと努めなければならない。 罰：ペナルティキック
			(b)		プレーヤーはラックの中で故意に倒れたり、膝をついてはならない。これは危険なプレーである。 罰：ペナルティキック
			(c)		プレーヤーは故意にラックをくずしてはならない。これは危険なプレーである。 罰：ペナルティキック
			(d)		プレーヤーはラックの上に飛びかかってはならない。 罰：ペナルティキック
			(e)		プレーヤーは頭と肩を腰より低くしてはならない。 罰：フリーキック
			(f)		ボールをラッキングするプレーヤーは、地面に横たわっているプレーヤーを故意にラッキングしてはならず、また、またぐように努めなくてはならず、故意に踏んではならない。プレーヤーはボールに近接してのみラッキングすることができる。 罰：ペナルティキック

条1	条2	項1	項2		内容
16		4	(a)	その他の反則	プレーヤーはラックの中へボールを戻してはならない。 罰：フリーキック
			(b)		プレーヤーはラックの中のボールを手で扱ってはならない。ただし、タックル後に、ラックが形成される前に立っている状態でボールに手を置いている場合を除く。 罰：ペナルティキック
			(c)		プレーヤーはラックの中のボールを脚で拾い上げてはならない。 罰：ペナルティキック
			(d)		ラックの中、またはラックに近接して地上に横たわっているプレーヤーは、ボールから離れようと努めなければならない。これらのプレーヤーは、ラックの中のボール、またはボールがラックから出てくるのを妨害してはならない。 罰：ペナルティキック
			(e)		プレーヤーはラックから出てくるボールの上に、またはそのボールを越えて倒れこんではならない。 罰：ペナルティキック
			(f)		プレーヤーはボールがラックの中にある間に、あたかもボールがラックから 出たと相手側に思わせるような素振りをしてはならない。 罰：フリーキック
		5	(b)	ラックにおけるオフサイド	プレーヤーはオフサイドラインの後方からラックに参加するか、ただちに後方に下がらなければならない。プレーヤーがラックの横でうろうろしている場合、そのプレーヤーはオフサイドである。 罰：ペナルティキック
			(c)		ラックに参加する、または、再び参加するプレーヤー：ラックに参加するプレーヤーは、ラックの中の最後尾の味方の足の後方から参加しなければならない。プレーヤーはこの最後尾のプレーヤーに並んでラックに参加してもよい。プレーヤーが相手側からラックに参加したり、最後尾の味方の前方に参加した場合、そのプレーヤーはオフサイドである。オフサイドにならなければ、相手プレーヤーにバインドしてもよい。 罰：反則をした側のオフサイドライン上でペナルティキック
			(d)		ラックに参加していないプレーヤー：プレーヤーがオフサイドラインの前方にとどまりラックに参加していない場合、そのプレーヤーは直ちにオフサイドラインの後方に退かなければならない。オフサイドラインの後方にいるプレーヤーが、オフサイドラインを踏み越え、しかもラックに加わらない場合、そのプレーヤーはオフサイドとなる。 罰：反則をした側のオフサイドライン上でペナルティキック

条1	条2	項1	項2		内容
17		2	(a)	モールへの参加	モールに参加するプレーヤーは、頭と肩を腰よりも低くしてはならない。 罰：フリーキック
			(b)		プレーヤーは、ただ単にモールのそばにいるだけではなく、モールの中に引きこまれているか、バインドされていなければならない。 罰：ペナルティキック
			(c)		モールの中で他のプレーヤーに手をかけていることはバインドしていることにはならない。 罰：ペナルティキック
			(d)		モールの中のプレーヤーは、立っていようと努めなければならない。モールの中のボールキャリアーは、地面に倒れてもよいが、直ちにボールをプレー継続可能な状態にしなければならない。 罰：ペナルティキック
			(e)		プレーヤーは故意にモールをくずしてはならない。これは危険なプレーである。 罰：ペナルティキック
			(f)		プレーヤーはモールの上に飛びかかってはならない。 罰：ペナルティキック
		3	(a)	その他の反則	プレーヤーは相手側のプレーヤーをモールの中から引きずり出そうとしてはならない。 罰：ペナルティキック
			(b)		プレーヤーはボールがモールの中にある間に、あたかもボールがモールから出たと相手側に思わせるような素振りをしてはならない。 罰：フリーキック
		4	(b)	モールでのオフサイド	プレーヤーはオフサイドラインの後方から参加するか、ただちに後方に下がらなければならない。プレーヤーがモールの横でうろうろしている場合、そのプレーヤーはオフサイドである。 罰：反則をした側のオフサイドライン上でペナルティキック
			(c)		モールに参加するプレーヤー：モールに参加するプレーヤーはすべて、モールの中の最後尾の味方の足の後方から参加しなければならない。プレーヤーはこの最後尾のプレーヤーに並んでモールに参加してもよい。プレーヤーが 相手側からモールに参加したり、味方の最後尾の前方に参加した場合、そのプレーヤーはオフサイドである。 罰：反則をした側のオフサイドライン上でペナルティキック
			(d)		モールに参加していないプレーヤー：プレーヤーがオフサイドラインの前方にとどまりモールに参加していない場合、そのプレーヤーは直ちにオフサイドラインの後方に退かなければならない。オフサイドラインの後方にいるプ レーヤーが、オフサイドラインを踏み越え、しかもモールに加わらない場合、そのプレーヤーはオフサイドとなる。 罰：反則をした側のオフサイドライン上でペナルティキック
			(e)		モールから離れるか、モールに再び参加しようとするプレーヤー：プレーヤーがモールから離れた時は、そのプレーヤーは直ちにオフサイドラインの後方に下がらなければならない。そうしない場合そのプレーヤーはオフサイドとなる。味方の最後尾の前方でモールに再び参加すれば、そのプレーヤーはオフサイドである。プレーヤーは味方の最後尾に並んでモールに再び参加してもよい。 罰：反則をした側のオフサイドライン上でペナルティキック
			(f)		モールの中で、ボールを保持していないチームのプレーヤーが、自らモールから離れ、そのチームのプレーヤーがモールの中に誰もいなくなった場合、モールは継続が可能で、この場合、2つのオフサイドラインが形成される。ボールを保持しているチームのオフサイドラインは、モールの中の最後尾の足を通り、ボールを保持していないチームのオフサイドラインは、モールでボールを保持しているチームの最前列の足を通る線である。 罰：ペナルティキック
			(g)		モールの中で、ボールを保持していないチームのプレーヤーが、自らモールから離れ、そのチームのプレーヤーがモールの中に誰もいなくなった場合、そのチームのプレーヤーは、一人目のプレーヤーがボールを保持しているチームの最前列のプレーヤーにバインドすれば、モールに再び参加することができる。 罰：ペナルティキック
18		7	(a)	ペナルティキックが与えられる場合	相手側プレーヤーは、オンサイド、オフサイドにかかわらず、レフリーが笛を吹いた後にマークしたプレーヤーにチャージしてはならない。 罰：ペナルティキック

条1	条2	項1	項2		内容
19		2	(h)	クイックスローイン	クイックスローインでは、いずれのプレーヤーもボールが5メートル投げ入れられることを妨げてはならない。 罰：15メートルライン上でフリーキック
			(i)		タッチに押し出されたボールキャリアーはプレーヤーがクイックスローインをできるように、ボールを放さなければならない。 罰：15メートルライン上でペナルティキック
		7	(b)	正しくない投入	ボールは、遅滞なく、また投げ入れるふりをすることなく、投げ入れなければならない。 罰：15メートルライン上でフリーキック
			(c)		プレーヤーは、故意にまたは繰り返しボールを曲げて投げ入れてはならない。 罰：15メートルライン上でペナルティキック
		8	(a)	ラインアウトの形成	少なくとも双方のチームから2人のプレーヤーがラインアウトを形成しなくてはならない。 罰：15メートルライン上でフリーキック
			(c)		ボールを投入する相手側のチームのラインアウトプレーヤーは、ボールを投入する側のラインアウトプレーヤーより少なくてもよいが、多くてはならない。 罰：15メートルライン上でフリーキック
			(d)		ボールがタッチになったとき、ラインオブタッチに近づくプレーヤーはすべて、ラインアウトを形成するために近づくものとみなされる。ラインアウトに近づくプレーヤーは遅滞なくラインアウトに近づかなければならない。どちらの側のプレーヤーも一度ラインアウト内の位置につけば、ラインアウトが終了するまで離れてはならない。 罰：15メートルライン上でフリーキック
			(e)		ボールを投入する側が正常な人数より少ない人数で並んだ場合は、相手側に、それに応じてプレーヤーがラインアウトから離れるための適当な時間を与えなければならない。 罰：15メートルライン上でフリーキック
			(f)		ラインアウトから離れるプレーヤーは、遅滞なく、ラインアウトから10メートル後方のオフサイドラインまで下がらなくてはならない。オフサイドラインに下がる途中にラインアウトが終了したときは、そのプレーヤーはプレーに参加することができる。 罰：15メートルライン上でフリーキック
			(g)		故意にラインアウトの形成を遅らせてはならない。 罰：15メートルライン上でフリーキック
			(h)		ラインアウトプレーヤーの立つ位置：先頭のラインアウトプレーヤーは、タッチラインから5メートル以内に立ってはならない。最後尾のラインアウトプレーヤーの立つ位置は、タッチラインから15メートルを越えてはならない。その他のラインアウトプレーヤーは、この2点の間に立たなくてはならない。 罰：15メートルライン上でフリーキック
			(i)		レシーバーの立つ位置：レシーバーは、ラインアウトが開始されるまで、味方のラインアウトプレーヤーから自陣ゴールライン側に2メートル以上離れ、さらにタッチラインから5メートル～15メートルの範囲に位置しなければならない。 罰：15メートルライン上でフリーキック 例外：レシーバーは、ラインアウトのギャップに走り込み、ラインアウトプレーヤーに認められているどのプレーを行ってもよい。レシーバーは、他のラインアウトプレーヤーと同様に、ラインアウトに関する反則をすれば罰せられる。
			(j)		タッチと5メートルラインの間にいるプレーヤー：ボールを投入する側でないチームのプレーヤーは、ラインアウトが形成されるとき、自チームの側のタッチオブラインと5メートルラインの間にプレーヤーを1名置かなければならない。このプレーヤーは、ラインオブタッチから2メートル離れ、また、5メートルラインから2メートル離れて立たなくてはならない。 罰：15メートルライン上でフリーキック
			(l)		双方のラインアウトプレーヤーは、タッチラインに垂直な、平行した2列を形成しなくてはならない。 罰：15メートルライン上でフリーキック
			(m)		双方のラインアウトプレーヤーは、内側の肩と肩の間にはっきりとした間隔を空けておかなければならない。その間隔は、プレーヤーが直立した状態で決定される。 罰：15メートルライン上でフリーキック
			(n)		１メートルギャップ：双方のラインアウトプレーヤーの列は、ラインオブタッチから50センチメートル離れていなければならない。 罰：15メートルライン上でフリーキック
			(p)		ラインアウトが形成されてボールが投入される前に、プレーヤーは相手をつかんだり、押したり、チャージしたり、妨害したりしてはならない。 罰：15メートルライン上でペナルティキック

条1	条2	項1	項2		内容
19		10	(a)	ラインアウトにおける制限	ラインアウトプレーヤーは、ボールに向かって跳び上がるために相手のプレーヤーを支えにしてはならない。 罰：15メートルライン上でペナルティキック
			(b)		ラインアウトプレーヤーは、ラックあるいはモールが形成された場合を除き、ボールを持っていない相手側のプレーヤーを捕らえたり、押したり、チャージしたり、妨害したりつかんだりしてはならない。 罰：15メートルライン上でペナルティキック
			(c)		ラインアウトプレーヤーは、タックルしようとするときおよびボールをプレーしようとするときを除き、相手プレーヤーをチャージしてはならない。 罰：15メートルライン上でペナルティキック
			(d)		リフティングおよびサポート：プレーヤーがリフティングおよびサポート、またはいずれか一方を行う場合、ジャンプするプレーヤーの後方からはパンツより下を、正面からは太腿より下をサポートしない限り、ボールに向かってジャンプする味方のプレーヤーを持ち上げたり、サポートしたりすることができる。 罰：15メートルライン上でフリーキック
			(e)		プレグリップを認める：プレーヤーがボールに向かってジャンプする味方のプレーヤーを持ち上げるか、またはサポートする場合、ジャンプするプレーヤーの後方からはパンツよりも下を、正面からは太腿より下をプレグリップしない限り、プレグリップすることができる。 罰：15メートルライン上でフリーキック
			(f)		ボール投入前のジャンプ、サポート、またはリフティング：プレーヤーは、ボールを投入するプレーヤーの手からボールが離れる前に、ジャンプ、リフティング、またはサポートを行ってはならない。 罰：15メートルライン上でフリーキック
			(g)		プレーヤーを地上におろす：跳び上がる味方プレーヤーをサポートするプレーヤーは、どちらかの側のプレーヤーがボールを獲得したらすぐに、そのプレーヤーをおろさなくてはならない。 罰：15メートルライン上でフリーキック
			(h)		ラインアウトプレーヤーはタッチラインから5メートルより近い地点に立ってはならない。ラインアウトプレーヤーは、ボールが5メートル投げ入れられることを妨げてはならない。 罰：15メートルライン上でフリーキック
			(i)		ラインアウトプレーヤーは、ボールがそのプレーヤーを越えて投げられたときに、タッチラインと5メートルラインの間へ動いてもよい。その場合、ピールオフをするとき以外は、ラインアウトが終了するまで味方のゴールラインの方向に向かって動いてはならない。 罰：15メートルライン上でフリーキック
			(j)		ボールに向かって跳び上がるプレーヤーは、ボールを捕ろうとする、あるいは　ノックバックしようとするためには、両手か内側の腕を用いなければならない。ジャンパーは外側の腕だけ使ってボールを捕ろうとしたり、ノックバックしようとしてはならない。ただし、プレーヤーが両手を頭上に上げてプレーする場合には、どちらの手を用いてもかまわない。 罰：15メートルライン上でフリーキック
		11	(d)	ボールを投げ入れるプレーヤー	レシーバーの位置に動く。ただしこれは、他のプレーヤーがレシーバーの位置にいない場合に限る。これら以外の位置への移動は、オフサイドとなる。 罰：15メートルライン上でペナルティキック
		12	(a)	ピールオフ	ボールが投げ入れるプレーヤーの手を離れるまでピールオフを始めてはならない。 罰：ラインオブタッチに沿いタッチラインから15メートルの地点においてフリーキック
			(b)		ピールオフをするプレーヤーは、ラインアウトが終了するまで、ラインオブタッチとラインオブタッチから10メートルまでの間の区域内で動き続けなければならない。 罰：ラインオブタッチに沿いタッチラインから15メートルの地点においてフリーキック

条1	条2	項1	項2		内容
19		14	(a)	ラインアウトに参加しているプレーヤーのオフサイド	ボールがプレーヤーまたは地面に触れる前：プレーヤーはラインオブタッチを踏み越えてはならない。ボールがプレーヤーか地面に触れる前にラインオブタッチを踏み越えたプレーヤーは、オフサイドとなる。ただし、ボールを捕ろうと、ラインオブタッチの自陣側から跳び上がる場合を除く。 罰：15メートルライン上でペナルティキック
			(b)		ボールを捕ろうとして跳び上がったが、ボールを捕れずにラインオブタッチを越えてしまったプレーヤーは、すぐにオンサイドの位置に戻れば罰せられない。 ボールに向かって飛び上がる場合、どの方向に向かってステップしてもよいが、ラインオブタッチを越えてはならない。 罰：15メートルライン上でペナルティキック
			(c)		ボールがプレーヤーまたは地面に触れた後：相手側のプレーヤーをタックルするまたはタックルしようとする場合を除き、ボールがプレーヤーまたは地面に触れた後に、ボールを持っていないプレーヤーが、ボールより前方に踏み出したとき、そのプレーヤーはオフサイドである。このようにタックルあるいはタックルしようとする行為は、ボールの位置より味方の側からしなければならない。 罰：15メートルライン上でペナルティキック
			(d)		レフリーは、プレーヤーが、故意であるか否かにかかわらず、ボールを獲得しようとするか相手をタックルしようとせずに、オフサイドの位置に動いた場合には、ペナルティを科さなくてはならない。 罰：15メートルライン上でペナルティキック
			(e)		ラインアウトに参加しているいずれの側のプレーヤーも、ラインアウトが終了するまでラインアウトから離れてはならない。 罰：15メートルライン上でペナルティキック
			(f)		ロングスローイン：ボールを投入するプレーヤーが15メートルラインを越えてボールを投げ入れる場合、ラインアウトに参加しているプレーヤーは、ボールが投げ入れるプレーヤーの手を離れたら直ちに、15メートルラインを越えて動くことができる。 この場合、相手側プレーヤーも動くことができる。ロングスローインされるボールを取ろうとして動いたが、ボールが15メートルラインを越えて投げ入れられなかった場合、そのプレーヤーはオフサイドとなり、罰せられる。 罰：15メートル上でペナルティキック。
			(i)		ラインアウトに参加しているプレーヤーは、ラックもしくはモールに参加する、またはオフサイドラインまで下がってそこにとどまる、のいずれかをしなければならない。これに反するとき、そのプレーヤーはオフサイドとなる。 罰：15メートルライン上でペナルティキック。
			(j)		上記以外は、ラックおよびモールの規定を適用する。プレーヤーは相手側からラックまたはモールに加わってはならない。 罰：ペナルティキック
			(k)		プレーヤーが、オフサイドラインの前からラックまたはモールに加わった場合、そのプレーヤーはオフサイドとなる。 罰：15メートルライン上でペナルティキック

条1	条2	項1	項2		内容
19		15	(a)	ラインアウトに参加していないプレーヤーのオフサイド	ラインアウトが終了する前に、ラインアウトに参加していないプレーヤーがオフサイドラインを踏み越えた場合、そのプレーヤーはオフサイドとなる。 罰：反則したチームのオフサイドライン上、反則した場所に相対した地点においてペナルティキック。ただし、少なくともタッチラインから15メートルの地点においてペナルティキック。
			(b)		ボールが投げ入れられた時点でオンサイドではないプレーヤー：ボールを投げ入れるプレーヤーは、味方のプレーヤーがオフサイドラインまで下がる前に、ボールを投げ入れてもよい。ただし、すみやかにオンサイドの位置まで下がろうとしないプレーヤーは、オフサイドとなる。 罰：反則したチームのオフサイドライン上、反則した場所に相対した地点においてペナルティキック。ただし、少なくともタッチラインから15メートルの地点においてペナルティキック。
			(c)		ロングスローイン：ボールを投入するプレーヤーが、15メートルラインを越えてボールを投げ入れる場合、同じチームのプレーヤーは、ボールが投げ入れるプレーヤーの手を離れたら直ちに前進することができる。ボールを投入する側のプレーヤーが前進した場合は、相手側プレーヤーも前進してよい。ロングスローインされるボールを取ろうとして前進したが、ボールが15メートルラインを越えて投げ入れられなかった場合、そのプレーヤーは、オフサイドとなり、罰せられる。 罰：反則したチームのオフサイドライン上、反則した揚所に相対した地点においペナルティキック。ただし、少なくともタッチラインから15メートルの地点においてペナルティキック。
			(d)		ラインアウトからのラックおよびモール：ラインアウトでラックまたはモールが形成された場合、ラックまたはモールに参加しているすべてのプレーヤーの足が、ラインオブタッチを越えて移動したとき、ラインアウトは終了する。 ラインアウトが終了するまで、オフサイドラインは、ラインオブタッチの後方10メートルまたは味方のゴールラインのうち、いずれか近い方の線である。オフサイドラインを踏み越えたプレーヤーは、オフサイドとなる。 罰：反則したチームのオフサイドライン上、タッチラインから少なくとも15メートルの地点においてペナルティキック。

条1	条2	項1	項2		内容
20		1	(d)	スクラムの形成	スクラムの形成を故意に遅らせてはならない。 罰：フリーキック
			(e)		プレーヤーの数：スクラムの形成は、双方それぞれ8人のプレーヤーによらなければならない。その8人のプレーヤーは、スクラムが終了するまで継続してバインドしていなければならない。双方のフロントローはいかなる場合でも3人のプレーヤーでなければならない。2人のロックが2列目を形成しなければならない。 罰：ペナルティキック 例外：いかなる理由からでも、いずれかのチームの人数が15人より少なくなった場合は、双方のチームはスクラムに参加するプレーヤーの人数を同じだけ減らしてもよい。一方のチームがスクラムに参加する人数を減らしたとき、もう一方のチームが同じ人数に合わせる必要はない。なお、いずれの場合も、少なくとも5人のプレーヤーがスクラムに参加していなければならない。 罰：ペナルティキック
			(f)		まず、レフリーは片足でスクラムが組まれる地点を示す。双方のフロントローは、組み合うまでは腕の長さ以内の間隔を空けておかなければならない。スクラムハーフがボールを持ち投入できる状態になったら、双方のフロントローは、組み合ったときに頭と肩が腰より低くならないように、腰を落とした姿勢をとらなければならない。フロントローの頭は交互に組み合っていなければならない。フロントローの頭は交互に組み合い、チームメートの頭が隣にこないようにしなければならない。 罰：フリーキック
			(g)		レフリーは「クラウチ」そして「タッチ」をコールする。「クラウチ」でフロントローは腰を落とした充分な姿勢をつくり、フロント1・3番は外側の腕で、相手の肩の外側に軽く触れ、その後、腕を引く。そしてレフリーは「ポーズ」のコールで充分な静止状態を確認した上で、「エンゲージ」をコールする。「エンゲージ」は命令ではなく、フロント同士で準備ができたら組み合ってよい、というコールである。 罰：フリーキック
			(i)		フロントローが相手側とある距離を隔てて突進してスクラムを組むことは、危険なプレーである。 罰：ペナルティキック
			(j)		スクラムは、ボールがスクラムハーフの手を離れるまでは、中央の線がゴールラインに平行になるように静止していなければならない。ボールが投入される前に、スクラムを押してはならない。 罰：フリーキック
		2	(a)	フロントローの姿勢	スクラムが形成されたら、フロントローは、前への押しが有効となるよう、足の位置と体勢を正しくとらなければならない。 罰：フリーキック
			(b)		このことはつまり、フロントローは、両足を地面につけ、少なくとも片方の足にしっかりと自分の体重を乗せなければならないということである。他のフロントローの足と交差することはかまわないが、個々のフロントローが 自らの右足と左足を交差させてはならない。また、フロントローの肩は腰より低くしてはならない。 罰：フリーキック
			(c)		フッカーは、ボールが投入されるまではフッキングポジションをとらなければならない。両足を地面につけ、少なくとも片方の足にしっかりと自分の体重を乗せなければならない。フッカーの前方の足は、味方両プロップの前の足より前方にあってはならない。 罰：フリーキック

条1	条2	項1	項2		内容
20		3	(a)	スクラムでのバインディング	すべてのフロントロー：フロントローは、スクラムが開始してから終了するまで、しっかりと、継続して、互いにバインドしていなければならない。 罰：ペナルティキック
			(b)		フッカー：フッカーのバインドは、プロップの腕の上からでも腕の下からでもいずれでもよい。両プロップは、フッカー自身のどちらの足にも体重がまったくかからないような状態にして支えてはならない。 罰：ペナルティキック
			(c)		ルースヘッドプロップ：ルースヘッドプロップは、左腕を相手のタイトヘッドプロップの右腕の内側にして、タイトヘッドプロップのジャージの背中または脇をつかみ、タイトヘッドプロップとバインドしなければならない。ルースヘッドプロップは、相手のタイトヘッドプロップの胸、腕、袖、またはえりをつかんではならない。ルースヘッドプロップは下方へ力をかけてはならない。 罰：ペナルティキック
			(d)		タイトヘッドプロップ：タイトヘッドプロップは、右腕を相手のルースヘッドプロップの左上腕の外側にして、相手ルースヘッドプロップとバインドしなければならない。タイトヘッドプロップは、右手だけで相手ルースヘッドのジャージの背中または脇をつかまなければならない。タイトヘッドプロップは、相手のルースヘッドプロップの胸、腕、袖、または襟をつかんではならない。タイトヘッドプロップは下方へ力をかけてはならない。 罰：ペナルティキック
			(f)		他のすべてのプレーヤー：スクラムに参加しているプレーヤーは、フロントローを除き、スクラムが組まれる前に、少なくとも一方の腕を味方ロックのいずれかにバインドしなければならない。ロックは、前にいるプロップとバインドしなければならない。プロップ以外のプレーヤーは、相手側のプレーヤーをつかんではならない。 罰：ペナルティキック
			(g)		フランカーは、規定どおりバインドしていれば、どのような角度でスクラムにバインドしてもよいが、外側に開くことで相手のスクラムハーフがスクラムの横を前進することを妨害してはならない。 罰：ペナルティキック

条1	条2	項1	項2		内容
20		5		スクラムへのボールの投入	スクラムハーフは、双方のフロントローが組み合うとすぐにボールを投入しなければならない。レフリーがボールを投入するよう命じた時は、直ちに、最初に選んだ側から投入しなければならない。 罰：フリーキック
		6	(a)	スクラムハーフによるボール投入	立つ位置は、中央の線上、スクラムの地点から少なくとも1メートル離れた場所で、頭がスクラムに触れたり、一番近いフロントローを越えたりしてはならない。 罰：フリーキック
			(b)		ボールは、膝と足首の中間の高さで、フロントローの間の中央の線上、ボールの軸が地面と、かつタッチラインと平行になるように両手で持つ。 罰：フリーキック
			(c)		すばやい動作で投入する。トンネルの外側でボールを手放す。 罰：フリーキック
			(d)		中央の線に沿いまっすぐに、最も近いプロップの肩の幅を越えた地点において先ず地面に触れるよう投入する。 罰：フリーキック
			(e)		ボールを投入するふりや、後へ引く動作をせず、前方へ単一動作で投入する。 罰：フリーキック
		8	(a)	フロントロー	フットアップ：フロントローはすべてその足を、トンネルをはっきりと形成するように置かなければならない。ボールがスクラムハーフの手を離れるまで、フロントローは足を上げたり、前へ出してはならない。いずれのプレーヤーもボールがスクラムに投入されるのを妨げたり、ボールが正しい位置で地面に触れるのを妨げてはならない。 罰：フリーキック
			(c)		フロントローは、ボールが入れられた方向に向って、ボールを故意にトンネルから蹴り出してはならない。 罰：フリーキック
			(e)		ボールが繰り返し蹴り出される場合、レフリーはそれを故意であると見なし、蹴り出したプレーヤーを罰しなければならない。 罰：ペナルティキック
			(f)		フロントローは、両足でボールをかいてはならない。ボールが投入される瞬間も、スクラムが組まれているあいだも常にプレーヤーは故意に両足を上げてはならない。 罰：ペナルティキック
			(g)		フロントローは、体をねじったり、低くしたり、相手を引っぱったり、あるいはその他、スクラムをくずすことにつながる行為をしてはならない。これは、単にボールが投入される瞬間に限られるものではなく、スクラムが組まれているあいだ常に適用される。 罰：ペナルティキック
			(h)		レフリーはスクラムを故意にくずす行為に対しては、厳格に対処しなくてはならない。これは、危険なプレーである。 罰：ペナルティキック
			(i)		フロントローは、相手を宙に浮かしたり、スクラムから上方に押し出したりしてはならない。これは、単にボールが投入される瞬間に限られるものではなく、スクラムが組まれているあいだ常に適用される。これらは、危険なプレーである。 罰：ペナルティキック
		9	(a)	スクラムにおける、その他の制限	スクラムに参加するすべてのプレーヤー：故意にスクラムをくずしてはならない。故意に倒れたり、地面に膝をついてはならない。これらは危険なプレーである。 罰：ペナルティキック
			(b)		スクラムの中にあるボールを手で扱ったり、脚で拾い上げてはならない。 罰：ペナルティキック
			(c)		足および脚の膝から下の部分以外で、スクラムの中のボールを取り込もうとしてはならない。 罰：フリーキック
			(d)		スクラムから出たボールをスクラムの中に戻してはならない。 罰：フリーキック
			(e)		スクラムから出てくるボールの上に、あるいはボールを越えて倒れ込んではならない。 罰：ペナルティキック
			(f)		ロックとフランカー：フロントロー以外のプレーヤーは、トンネルの中にあるボールをプレーしてはならない。 罰：フリーキック

条1	条2	項1	項2		内容
20		9	(g)	スクラムにおける、その他の制限	スクラムハーフ：スクラムの中にあるボールを蹴ってはならない。 罰：ペナルティキック
			(h)		ボールがスクラムの中にある間、相手にあたかもボールがスクラムから出たと思わせるような行動をしてはならない。 罰：フリーキック
			(i)		スクラムハーフは、相手フランカーをつかんではならない。 罰：ペナルティキック
		12	(b)	スクラムにおけるオフサイド	スクラムハーフのオフサイド：ボールを獲得した側のスクラムハーフは、ボールがスクラムの中にある間、両足をボールより前に出した場合にはオフサイドとなる。片足のみボールより前に出した場合にはオフサイドにならない。 罰：ペナルティキック
			(c)		ボールを獲得しなかった側のスクラムハーフは、ボールがスクラムの中にある間、片足でもボールより前に出した場合にはオフサイドとなる。 罰：ペナルティキック
			(d)		ボールを獲得しなかった側のスクラムハーフが、ボールが入れられる反対側に動いて、オフサイドラインを踏み越えた場合はオフサイドとなる。そのスクラムハーフのオフサイドラインは、味方チームのスクラムの最後尾の足を通るラインである。 罰：ペナルティキック
			(e)		ボールを獲得しなかった側のスクラムハーフが、スクラムから離れた位置に動いて、オフサイドラインの前方にいる場合はオフサイドとなる。そのスクラムハーフのオフサイドラインは、味方チームのスクラムの最後尾の足を通るラインである。 罰：ペナルティキック
			(f)		双方いずれのプレーヤーも、スクラムにおいてスクラムハーフとなることができるが、それぞれのスクラムについて１人のスクラムハーフしか置くことができない。 罰：オフサイドライン上でペナルティキック
			(g)		スクラムに参加していないプレーヤーのオフサイド：双方の、スクラムに参加していないプレーヤーでスクラムハーフ以外のプレーヤーは、オフサイドラインの前方にとどまるか、オフサイドラインを踏み越えた場合、オフサイドとなる。オフサイドラインは、ゴールラインに平行なラインであり、スクラムに参加する各チームの最後尾のプレーヤーの足の位置よりも 5メートル後方のラインとなる。 罰：オフサイドライン上でペナルティキック
			(i)		スクラムが形成されているとき、スクラムに参加していないプレーヤーは直ちにオフサイドラインまで退かなければならない。うろうろするプレーヤーには、罰を科す。 罰：オフサイドライン上でペナルティキック

条1	条2	項1	項2		内容
21		2	(b)	キックの行われる地点	インゴール内でペナルティまたはフリーキックが与えられる場合、マークはフィールドオブプレー内ゴールラインから5メートル、反則の起った地点に相対する地点となる。 罰：キッカー側の反則に対してはゴールラインから5メートルの反則が起った地点に対向する地点でのスクラム。相手側がボールを投入する。
		3	(b)	キックの方法	膝でボールをはずませることはキックとはみなされない。 罰：キッカー側の反則に対してはマークにおいてスクラム。相手側がボールを入れる。
			(c)		レフリーが不適当と認めない限り、それまでにプレーしていたボールでキックを行わなければならない。 罰：キッカー側の反則に対してはマークにおいてスクラム。相手側がボールを入れる。
		7	(d)	ペナルティキックで相手側のすべきこと	妨害行為：相手側は、ペナルティキックが行われるのを遅らせたり、キッカーを妨害するようないかなる行為も行ってはならない。ボールを故意に取る、投げる、あるいは蹴って、キッカーおよびキッカー側チームからボールを遠ざけてはならない。 罰：相手側の反則に対しては、最初のマークから10メートル前方でふたたびペナルティキック。マークはゴールラインより5メートル以内であってはならない。どのプレーヤーでもキックすることができる。キックの種類を変えることもゴールキックを選択することもできる。レフリーがふたたびペナルティキックを与えた場合は、レフリーがマークを示す前にキックを行ってはならない。
		8	(h)	フリーキックで相手側のすべきこと	チャージダウン：相手側が競技区域においてフリーキックをチャージダウンした場合はプレーを続行する。 罰：相手側の反則に対しては、最初のマークから10メートル前方でふたたびフリーキック。マークはゴールラインより5メートル以内であってはならない。どのプレーヤーでもキックすることができる。レフリーがふたたびフリーキックを与えた場合は、レフリーがマークを示す前にキックを行ってはならない。
22		16		インゴール内での反則	インゴールにおけるすべての反則に対する罰は、フィールドオブプレーにおける反則に対する罰と同一である。 インゴール内でのノックオン、スローフォワードは5メートルスクラムとなり、反則の場所に相対する地点で行われる。 罰：反則に対して与えられる、ペナルティキックあるいはフリーキックのマークはインゴール内にあってはならない。反則があり、ペナルティキックもしくはフリーキックがインゴール内で与えられる場合、マークは反則の場所に相対する、ゴールラインから5メートルの地点である。
		17	(c)	インゴール内での不行跡および不当なプレー	その他の不正なプレー：競技が停止されている間のインゴールでのその他いかなる不正なプレーに対しても、その反則がなければ次に競技を再開する予定であった地点においてペナルティキックを与える。 罰：ペナルティキック